

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	ルネサンス・ヒューマニズムの成立とその展開
Author(s)	島田, 雄次郎
Citation	歴史研究(32): 1-12
Issue Date	1966-12-18
URL	http://hdl.handle.net/10109/7984
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

ルネサンス・ヒューマニズムの

成立とその展開

島 田 雄 次 郎

一、イタリア・ヒューマニズムの展開

ルネサンスと宗教改革は近世史の曙を彩る二つの精神運動であります。この両者の関係については様々なことが言われて参りました。ルネサンスも宗教改革もともに中世に対する一種の反逆であり、共に携えて新時代を切り開いたことは事実であります。とりわけルネサンスのヒューマニズムはその古典研究の方法をキリスト教の古典に適用して、宗教改革の聖書中心主義に学問的根拠をあたえた事実は重要であり、この点でルネサンスのヒューマニズム運動は宗教改革に前駆的役割をはたしたともいわれております。しかしまたそこには明白な対立も見られるわけでして、両者の歴史的意義の共通性を強調する余り、両者のちがいに目を覆うことは許されないことでありましょう。両者の微妙な触れあいと、そのちがい、このことをあらかじめ念頭に置いて、これから私はルネサンスのヒューマニズムについてお話してみたいと思ひます。

ヒューマニズムというのは、文字通り訳せば、もちろん人間主義となります。ルネサンスは人間の発見であったとよくいわれます。人間らしく生きること、それがルネサンス人の願ひでしたが、しかしこの際ルネサンス人がその人間らしく生きることの模範をキリスト教以前のラテン・ギリシヤの異教的古典に求めたことは重要であります。人間主義はこうして古典研究と結びつきます。そしてこの意味におけるヒューマニズムをわれわれは人文主義と訳すのでありますが、ルネ

サンス・ヒューマニズムは人文主義であることがその特徴であると云つてもよいでしょう。この話の中で、これからも屢々でてくるヒューマニズムという言葉は人文主義としての意味であることを予め諒解して頂きたいと思ひます。

ルネサンスを人間の発見と考えますと、古典研究と結びついたヒューマニズムは、ルネサンスに特有のものとなるわけですが、フランスの有名な中世学者のエティエンヌ・ジルソンという人は、この意味でのヒューマニズムは中世にもある自然の尊重とギリシヤ・ラテンの古典に対する愛は中世にも生きていたと申しております。この人には「中世ヒューマニズムと文芸復興」という本がありまして、翻訳もされておりますが、彼のいうことを更に敷衍しますと、霊の世界と肉の世界——この二つの立場に立つ二元主義的な考え方は中世に特徴的なもので、中世ではこの場合、肉の世界は霊の世界に対して従属的な関係にあるとされていても、なお肉の世界にもそれとしての意味は認められていたのだ。この中世人の氣持が中世ヒューマニズムを生み出したので、中世では霊と肉、神と人間が美しい調和を保っていたというのであります。ジルソンによれば、ルネサンスのヒューマニズムは肉の世界に人間の一面的な強調で、そこでは霊が、神が忘れさられたことが特徴的なのだというのであります。ジルソンによればルネサンスは、だから、中世マイナス神として定式化されることとなります。ルネサンスが「人間の発見」であるといわれることのいわばカトリック学者としての、うらがえしの表現であります。ともあれルネサンスはこゝでも全く世俗的人間的な、そして非宗教的な運動として理解されているわけでありませぬ。

このジルソンのルネサンスについての定義づけは、仲々含蓄にとんだものと私には考えられるのですが、しかしルネサンス人が必ずしも宗教に対して敵対的でなかつた点も注意されなければなりません。一寸考えてみただけでも、一千年に及ぶ中世的キリスト教的伝統、霊の世界の優越の理想はそう簡単になくなるわけのものではありません。最初のヒューマニストと云われたペトラルカは、異教的古典に対する限りない愛情とその「より人間的なもの」に対する憧れにも拘わらず、沢山の手紙や随想の中で、孤独と瞑想に対する喜びを語り、魂の平和をうるために現世を蔑視する風を示しております。また彼の弟子である「デカメロン」の著者ボッカチオも、晩年には懺悔聽聞僧のすゝめで修道士になることを真剣に考えたといわれております。宗教的なものに対する憧れは、彼らの世俗性に人間主義にも拘らず彼らの心の中に生きつゞけていたのであります。

キリスト教以前のラテン・ギリシャの古典、その中にルネサンス人は「より人間的なもの」を感じとりました。より人間的に生きることが彼らの要求でした。霊の世界と肉の世界の関係を逆転させること、それが彼らの願いでした。しかし宗教的心情を彼らは必ずしも棄てきれなかつたのであります。

この彼らに対して、もし、キリスト教以前の異教的古典の中に、彼らのこの要求を満足させるようなものが見出されたとしたら、彼らの喜びはどんなものだったでしょう。十四世紀末からイタリアではギリシャ古典の復興がはじまりました。彼らの要求をみたすものを彼らはこのギリシャ古典の中に、特にプラトンの中に見出したのであります。プラトンがアリストテレスと共にギリシャ哲学の二大高峰であることは申すまでもありません。そしてアリストテレス哲学がトマス・アクイナスに代表される中世スコラ神学の壮大な体系の基礎となつたことも御承知の通りであります。先程申しましたジルソンのいわゆる中世ヒューマニズムはこゝにも、こゝにこそ、はっきり示されております。このアリストテレスに代つて今やプラトンが登場したのであります。アリストテレス哲学の体系的論理的であるのに対して、むしろ非体系的で文法的であったプラトン哲学が、もともと文法的で抽象になじまないルネサンス人にとつてより一層親しみやすいものであつたということもいえるでしょう。しかしこの場合このプラトン哲学が著しく宗教的なヘレニズム時代の新プラトン主義ネオプラトニスムの形で伝えられたということは重要であります。

プラトンにとつてはその出発点は、中世的二元主義と同様に、肉の世界と霊の世界、感覚のそれと理念のそれとの対立的関係でありました。一方は下から、他方は上からやつてくる。現にあるがまゝの人間、肉の人間は墮落しているが、この人間が下の世界から上の世界に昇ることが出来るのは、たゞ憧憬と愛情によつてだけだといわけでありました。そしてこの点では新プラトン主義も同様であります。このプラトン哲学がルネサンス人に対して大きな共鳴を感じさせ、プラトン熱が高まって多くのプラトン主義者が現われて参りました。そしてこのプラトン復興の機運の中から、十五世紀の半ば頃、フィレンツェにプラトン・アカデミーというプラトン主義者のサークルが生まれます。このプラトン・アカデミーはフィレンツェの独裁者メディチ家のコシモのきも入りでできたものですが、彼等は時々集会を開き、特にプラトンの誕生日とか命日とかにはメディチ家の宮殿や別荘に集つて、プラトンの「饗宴」をよんだり、それにちなんだ對話に打興したりしました。ラチもない集りのようでしたが、これがイタリアのプラトン復興の中心となつたのであります。中世スコラ

哲学を支配したアリストテレスに代ってプラトンが人氣の中心となったわけで、それだけ中世は後退して新らしい時代が開けてきたともいえるわけでしょう。然しプラトン復興は単なるプラトン復興ではありませんでした。先程申しましたようにそれは極めて宗教的傾向の強い新プラトン主義を通じて伝えられたプラトンであったのです。そしてそれが却って宗教的関心をまだ捨てきれなかったヒューマンスト達にはピッタリとしていたのです。

このサークルの中にマルシリオ・フィチーノ（一四三三—一九九）という学才豊かな青年がおりました。メデイチ家のコシモはこの青年の学才を愛して彼をプラントン研究に導きました。彼は熱心にプラトンを研究致しました。そして彼の中でプラトン主義とキリスト教の融合がはじめられたのです。彼ははじめてパウロをプラトンの的に解釈致しました。パウロもプラトンと同様、その出発点は肉の生活と靈の生活の二元主義であります。ただプラトンとパウロのちがいはプラトンにとっては、また新プラトン主義者にとっても、下の内の世界から上の靈の世界への上昇、即ち人間の「救い」は、人間の意志に、自由な意志によるものであります。人は眼を光に、より高い方に向け、そしてはじめて俗悪な現実の上に行うことができるのであります。ところがパウロではこの救いは、専ら神の恩寵によるものでした。神とキリストを信ずること、これ以外に道はないのであります。このちがいをフィチーノと彼の仲間は見逃したのであります。ルネサンスという世界的な過渡期の混乱がこのような混同をもたらしたと、スイスのある学者は言っておりますが、とにかくこのような形ではじめてプラトン哲学とキリスト教を結びつける試みがヒューマンストの間で行われました。

ピコ・デラ・ミランドラはこうしたプラトン・アカデミーの雰囲気に触れて、最もヒューマンステイクな宗教観を展開させるに至ったのであります。ピコはその名の示すようにミランドラ伯爵家の御曹子でありました。一四六三年の生れであります。幼くして神童のほまれ高く、やがて彼の大学遍歴がはじまり、多方面な学識を身につけると共に、当時の知識人としては普通なラテン語、ギリシャ語の他にヘブライ語やアラビア語などの東方の言語まで学びました。彼の語学的才能は特に素晴らしいものがあつたといわれております。とにかく行くとして可ならざるはなき秀才で、それにまた大変眉目秀麗な貴公子であつたともいわれておるのであります。彼とマルシリオ・フィチーノの出会いの一つの語り草ともなっております。五十を過ぎて押しも押されもない大家のフィチーノと二十才そこそこの典雅な青年貴族との出会いでしたが、この青年のすぐれた学識は忽ちフィチーノを感激させ、二人はすぐ哲学上の問題について心ゆくまで話しあつた

ということであり、ピコはフィチーノから深く影響されました。彼はその多方面な学識とすぐれた語学力を駆使してプラトンとアリストテレスの融合、さらにキリスト教と諸々の異教の融合という野心的な課題に取り組みました。そしてまた彼のヘブライ語の知識を用いてユダヤ教の研究を行いました。この研究は多くの学者達の注意をひきました。この彼が一四八六年に「人間の尊厳について」という論文を書いておりましたが、われわれにとってこの論文は最も注意すべきものであります。この論文には幸にして日本語もありますが、彼はこの中で人間は神によって宇宙の中心におかれている、大宇宙に対する小宇宙であって一切の可能性をその中に含んでいる。人間の意志は自由であり、それは下降して下等な動物になることも出来れば、上昇して神に近づくことも出来ると言っております。丁度はしこの中段に位置しているような具合で、下るものぼるものも意志のままというわけであり、つまり人間の救いは結局はその自由意志にかかわるというわけであり、これは又何とも素晴らしい人間讃美であるといわなければなりません。一切無制約、完全な自由であります。ルネサンスほど人間の可能性に大きな信頼をおいた時代もないでしょう。そこでは行くとして可ならざるはなき万能の天才がもてはやされ、人間の知的並びに肉体的能力を多方面に、そして極限にまでのばすことに異常な熱情が注がれました。この人間能力の尊重と人間の万能性への信頼は、こうして人間の救い、解脱をも人間の自由意志に帰することになったのです。

ここで一寸、先程申上げたエチエンス・ジルソンの、ルネサンスは中世マイナス神だという言葉を出してみましよう。中世においては、このジルソンの考え方によりますと、神と人間が美しい調和を保っております。ルネサンスⅡ中世Ⅰ神という方程式は、ですから、これを中世に当てはめますと中世Ⅱ神十人間ということになります。神の恩寵と人間の努力、この両者が相俟つて人間の救いをもたらされるということになります。ところがこのピコ・デラ・ミランダに代表されるルネサンスのプラトン主義的ヒューマニストにとつては、端的に申しますならば、人間の救いは唯単に人間の努力によつて、つまりは人間の自由意志によつてのみもたらされることになり、正にルネサンスⅡ中世Ⅰ神であります。「人が主となる日をわれ求めたることなし」——これが中世を貫く信念でしたが、人間は今や正に主となったのであります。ピコが教会によつて異端の嫌疑をかけられたのも当然といわなければなりません。嫌疑ばかりでなく、彼はさらに破門の宣告まで受けて、一時フランスにのがれている有様です。メディチ家のロレンツォが彼を教会に取なすこと

につとめたことも申しそえておきましよう。彼はしかし熱病にかゝつて、三十そこそこの若さで死んでおります。まことに才子薄命ではありましたが、この彼の思想はアルブスをこえて北方に広まりました。イタリアのヒューマニズムがアルブスをこえて北方諸国に根づいてくるのは、十五世紀中頃からのことであります。しかし今や唯単に古典語・古典文芸への憧れに導かれた文学的なヒューマニズムに代つて、プラトン主義的に深められたより哲学的より宗教的なヒューマニズムが移植されることになりました。

ドイツにこれを伝えたのはあのロイヒリンであります。彼はイタリアで直接ピコと知りあい、彼のヘブライ学に大いに刺戟されて、みずからヘブライ語に熱中し、旧約原典の研究に進んで行きます。ムチアヌス・ルーフスの役割も無視できませんまい。彼は後、当時ドイツで最もヒューマニズムの盛んだったエルフルト大学の青年学徒に大きな影響をあたえますが、彼もまたイタリア遊学中ピコと交際してその思想の影響を受けております。フランスのルフエール・データブルもやはりイタリア留学中ピコから深い感銘をうけ、その思想をフランスに持帰りました。そして北方最果てのイギリスでも、グローシン、リナカーなどがプラトン・アカデミーの思想の移植に先駆者的な役割を演じましたが、その弟子の一人であつたジョン・コレットはみずからイタリアに学び、そこであらためてフィチーノやピコの学問から直接深い影響をうけ、プラトン主義によるヒューマニズム的な新しい神学研究に踏みざりました。このジョン・コレットの後輩に当るのが、あのユートピアの作者であるトマス・モアでモアはとりわけピコの熱心な崇拜者となり、ピコの甥のかいたピコの伝記の翻譯までしている有様です。やがて北方ヒューマニズムの王者と仰がれるあのエラスムスは、一四九九年、最初のイギリス滞在の際、このコレットやモアと交わり、とくにコレットの講義から多大の感銘をうけて新しい神学の研究に志すことになつたのであります。プラトン・アカデミーの学風はこうしてピコ・デラ・ミランドラをいわば扇の要かなめとして、ヨーロッパ全体に美事な展開を示したのであります。

イタリアで展開し発展したルネサンス・ヒューマニズムはこうした経過をへ、このような形で、やがておこるルタールターの宗教改革と触れあうことになるのですが、これについては次回にお話することに致します。

二、北歐ヒューマニズムとエラスムス

前回お話ししましたようにフィレンツェのプラトン・アカデミーの思想、とくにピコ・デラ・ミランドラの思想は、いたの著名なヒューマニスト達によって、北ヨーロッパに移し植えられました。ピコを扇の要として極めて宗教性のつよいプラントン主義的ヒューマニズムの思想が全ヨーロッパに美事な展開を示したのであります。

ところで当時のアルプス以北の国々ですが、その中では特に南ドイツとネーデルランドがわれわれの注目を惹きます。両者ともに比較的豊かな市民生活がそこではくりひろげられておりました。地中海貿易を背景とする豪壮なイタリアの市民生活とは較べものにはなりません、日常に事欠かない豊かで穏やかな市民生活がそこにはありました。ルネサンス文化はまづイタリアの市民生活を背景として起りましたが、こゝには市民生活という点でそれと共通のものもちながら、イタリアのそれとはまた別個な新しい精神の息吹が息づいていたのであります。こゝではイタリアのそのような、時には神をなみする豪快な市民精神ではなく、謙虚な敬神の念が残っておりました。しかしこゝでの市民生活もまた新しい精神的要求を自覚させていたことを注意しなければなりません。彼らは謙虚で信心深かったけれども、もう今までのように何から何まで教会や坊さんの指図に従うような規則づくめ宗教——（教会宗教）——には憚あまたらないものを感じはじめていたのであります。市民の自立的精神がこゝにもやはり現われていたのです。彼等のこの要求を満足させるものはどんなものだったでしょう。それはずつとあっさりとして単純で、そして実際のなものでなければなりません。彼らの間にはそれを把えるために自分で信仰の源泉に溯つてみたいという要求が生れます。聖書を、また教父たちの著作も自分でよんでみたい。教養がほしいというわけでありませぬ。そして彼らはこの自分たちの要求を「人間的な」要求だと思ひました。「フマニタス」という言葉も彼らの間では実際にこんな意味で使われるようになったのです。そしてこのような新しい信仰の要求から、ネーデルランドでは在家の市民の間に新敬神派と呼ばれる運動が生れております。ですから南ドイツとネーデルランドが北方におけるヒューマニズムの拠点となったことは決して偶然ではありませんでした。しかもこゝで受けいられるヒューマニズムは単なる文学的な、そしてまた単に人間的世俗的なヒューマニズムではなく、宗教的な息吹きを通つたものでなければならぬ事も当然でありませぬ。プラント・アカデミー的なフィチーノ、ピコ的なヒュー

マニズムは、この二つの場所、南ドイツとネーデルランドに代表される雰囲気を背景に北方に拡まって行ったのであります。北方のヒューマニスト達はこの要求に答えなければなりません。神学的ヒューマニズム、いわゆるクリスチャン・ヒューマニズムがこうして彼らの課題となります。イタリアのプラトン主義的ヒューマニズムはその手掛りとなつたのであります。

時間もないことでありますし、細かなお話は到底できませんが、こゝではやがて北方ヒューマニズムの王者と仰がれることになるエラスムスに代表させて、お話を進めることに致します。

エラスムスは御承知のように、「痴愚礼讃」の作者でして、これには立派な日本訳もあり、また彼の「平和の訴え」も最近翻訳されましたが、彼はこれらの作品で当時の進歩的文化人として、当時の社会を痛烈に諷刺し、また人々の理性に訴えて戦争の無意味とその害悪を説いております。人間の自然の歪みをきらい、人間の理性を尊重しこれに信頼するいかにもヒューマニスト的な気持がこれらの作品の中にはよく生かされております。

さてこのエラスムスは、ロッテルダムのエラスムスといわれますように、ネーデルランドのロッテルダムに生まれました。生れた年は一四六六年、六七年、あるいは六九年と色々いわれますが、六九年説が最近では最も有方なようです。正式な結婚による出生ではありませんでしたが、とにかく彼がその少年時代、先程申し上げましたネーデルランドの新敬神派の学校で教育を受けたことは重要であります。フマニタスを重んずるこの派の教育では古典的教養も重んぜられましたから、古典的教養と実際的で簡明な信仰の追求という、このエラスムスの生涯を通ずる二つの基調はこの時代に深く彼の心の中に根をおろしたわけです。しかし彼にとつてしばらくは古典的文学的な関心が優勢で、宗教的な関心は表面に現われては参りませんでした。彼はその後、後見人によって修道院に送られ、やがてパトロロンを見つけて神学研究の名目でパリに遊学しますが、この間を通じて彼は古典的文学的な研究に没頭して、パリのヒューマニストの仲間に入り、その仲間では一寸した顔にもなります。この彼が名目だけでなく、ほんとうの神学に打ちこむようになるのは、彼が一四九九年にイギリスを訪問した時からでした。

パリでアルバイトにやっていた個人教師の仕事が取りもつ縁で、彼は若いイギリス人貴族と知り合い、この教え子に伴われて彼はイギリスにやってきました。こゝでエラスムスはグロッシン、リナカー、コレット、モアなどの素晴らしいサ

ーグルと近ずきになりました。これらの人々は前回申上げたようにプラトン、アカデミーの思想、ピコの思想を取り入れた人々でしたが、特にオックスフォードでコレットの講義を聞いたことは彼に深い感銘をあたえました。エラスムスはこゝではじめて、ヒューマンズムの基礎の上に中世的なスコラ神学を全面的に否定する人物と出会ったわけであり、単なる文学的修辭的なヒューマンズムをこえた高い展望が彼の前にひられました。新敬神派の学校が彼の中に植えつけた芽が、急に生長しはじめて、宗教的関心がつよく彼の心を動かしはじめました。聖書、特に新約にかえること、神父たちにかえること、そして新しい神学を確立すること、これが彼の目標になりました。そのために彼がまずギリシア語を物にしなければならぬと考えたのは、いかにもヒューマンストらしい決意ですが、とにかくこれが後、彼が新約聖書のラテン訳を行なう機縁となったわけであり、そして一方彼は一五〇四年に「キリスト教徒必携」を出して、こゝで彼の神学的なプログラムを展開しております。

知識と祈り、この二つを彼はこゝで特に強調しております。古典語（ラテン・ギリシア）と古典の知識、これを彼は聖書を理解するための欠くべからざる鍵と考えます。そしてその聖書に接するには純粹な敬神の念、祈りの心をもってしなければならぬというのであります。教会の様々な儀式や行事などはどうでもよいこと、むしろ有害なことになります。教養のうらづけをもつた簡明な信仰——これはいかにも新敬神派的といわなければなりません。

しかし彼はまた「神は心」とも言っております。そしてこの言葉は彼のプラトン主義的ヒューマンズムを如実に示すのだと解釈されております。彼はコレットとイギリスの仲間を通じてピコに、またプラトン・アカデミーに結びついたのであります。肉の世界と霊の世界、人間はその両者に属して中間にある。彼が一方から他方に移ることは心の問題である。すなわち「神は心」であります。

ところでやがて宗教改革者ルターは「信仰によるのみ」ということを申します。そしてこの立場から教会の儀式や行事、すべて外面的なことはいわゆる善行に至るまで否定致します。両者の間には多分に共通点があるように見受けられます。ちがいは一体何処にあるのでしょうか。

ともあれこの間エラスムスは、文学的ヒューマンストとしても精神的な活動を行ない、彼の名声の基になる様々な書物を出版しました。一五一一年には彼の「痴愚礼讚」がでて当時のベスト・セラーになり、彼の文名は揺ぎないものになり

ました。一方彼の新しい神学の基礎となる新約聖書の新ラテン語訳は一五一六年にでております。そしてこの一五一六年にヒューマンイズムの勝利は明白でありました。全ヨーロッパの知識人は挙げてヒューマンイズムに獲得され、エラスムスはこの知的王国の王者として仰がれていたのであります。ところがその翌年、一五一七年はルターの宗教改革がはじめられた年であります。ヒューマンイズム王国の繁栄も東の間、それはこのルターの一撃によって揺がざるをえないことになるわけですが、しかしはじめは多くのヒューマンストにとっては彼局は必ずしも意識されませんでした。とりわけ若いヒューマンスト達はこのルターの出現が新時代の、つまり彼ら若いヒューマンスト達の望む新時代の到来を意味するものであると考えて、ルターに対して熱狂的な態度をとりました。エラスムスに欲呼した彼らはルターにも同じ欲呼をおくったのであります。

ところでルターはエラスムスたちのことをどう考えていたでしょうか。一五一六年の秋のことです。ルターはある友人にあてた手紙の中で、エラスムスのパウロ解釈、ことに義認の概念には誤解があり、かつ原罪についての考えが足りないことを指摘しております。そして翌年一五一七年三月——ルターの宗教改革の発端、有名な九十五ヶ条の発表は十月です——ルターは次のように書いております。「私はいまエラスムスを読んでいるが、目を重ねるに従って私の彼に対する評価は下るばかりだ。彼の深い学殖をもってする僧侶の怠惰、無智についての論証は私を喜ばせる。しかし私は彼がキリストと神の恩寵の強調において十分でないことを危惧している。エラスムスにあっては人間について考える事の方が神のそれに立勝っているのだ」と。

これは正にエラスムスならびにヒューマンスト達一般の急所をついた言葉だと私には考えられます。人間主義者であるヒューマンストがまず人間のことを第一に考えることは当然でありましょう。そしてそこで如何に神学的表現が用いられ、神のことが云々され、神を敬うことの重大さが説かれているとしても彼らヒューマンストが神の前に人間を無にも等しいものと考えることのできないことはいうまでもありません。人間を本来罪に汚れたものと考え、つまり原罪の思想はおよそヒューマンイズムとは相容れないものであります。それどころか人間性に対する樂觀、人間能力に対する無限の信頼こそヒューマンイズムの基本であります。ピコ・デラ・ミランダは人間は小宇宙であってあらゆる可能性をもっている。それは上昇して——自らの力、自らの意志によって——神に近づくこともできる、と申しました。そしてエラ

スミスにとつても「神は心」であつたのであります。人間が救われるか救われないかは、一にかかつて人々の心がけによることになりました。言葉をかえていうならば人間の自由意志に帰着することになります。

ところがルターにとつては、パウロの次の言葉が出発点であります。「凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受けるに足らず、功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり」、これが出発点であります。ルターの「信仰によつてのみ」はここからでて参ります。しかし、エラスムスにとつて、またヒューマニスト達にとつて、「凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず」とは絶対になりえないでしょう。人は神の栄光を受けるに足るものでなくしてはヒューマニズムは成立しえませんが、たとすれば「功なくして神の恩恵により」も、「キリスト・イエスにある贖罪云々」も当然でてこないことになります。ルターがエラスムスを評してそのパウロ解釈に誤解があるというのは、この点でありましょう。そしてこのように明白な誤解は、前回お話ししましたように、過渡期の混乱がもたらした誤解というより他はないかと思ひますが、とにかくエラスムスとそのヒューマニズムにとつては、「功なくして」ではなく、あくまでも「功によつて」でなければなりません。人間の努力こそ問題なのであります。そして努力は意志に、自由意志に基いております。ところがルターによつては神こそ絶対であり、人間は無です。救いにおける人間の努力、人間の意志の役割を認めることは、神の絶対性を、その全能を否認することになります。ルターはかくして善行を否定致します。エチエンス・ジルソン流の方程式からいえば、宗教改革は中世マイナス人間であります。神の独裁です。ヒューマニズムとは絶対に相容れません。

エラスムスにとつて勿論これは我慢のできないことでした。人間が真面目な意志によつて歩一歩より高い境地に進みうるのではないとしたら、——これはエラスムスにとつては堪えがたい人間蔑視でした。ルターは神の恩寵が功なくしてあたえられることを知つて、はじめて心の平安を得たのですが、反対にこのルターの教説は、エラスムスにとつては人間に絶望以外の何ものをもたらすものではなかつたのであります。ルターとの対決をせまられていたエラスムスは、ついに一五二四年、「意志自由論」をもつてルターに立向いました。ルターがこれに憤激して翌一五二五年、「意志奴隸論」を叩きつけて、ついに両者の完全な決裂に終つたことは周知の事実であります。ルターに新時代の開幕を感じとり、エラスムスの神学とルターのその表面的な類似にあざむかれて、その本質的ちがいをみのがしていた多くのヒューマニスト達

は、このエラスムスの「自由意志論」によって目をさませられて、決定的にルターから離れてしまいました。そして彼らはカトリックの陣営に復帰しました。ヒューマニスト達にとっては、神ブラス人間であり、人間の努力、意志にもその役割を認める中世カトリシズムの立場の方がまだしも、住みよかつたからに他なりません。しかしルネサンスは、従ってヒューマニズムは、ジルソン流にその本質規定をすれば中世マイナス神であります。人間の一人歩きです。それは宗教というよりもむしろ道徳の問題を主たる関心事といたします。道徳の立場での、宗教と道徳との混同がそこにあるといってもよいでしょう。エラスムスたちは宗教の問題を道徳の次元に移したわけで、そこから有名な「聖なるソクラテス」というエラスムスの呼びかけも生れ、彼が彼のいわゆる神学を突はキリストの神学と呼ばず、キリストの哲学と呼んだ理由も理解されるわけでしょう。正しい道徳的な生活に導くものはすべて「聖」なるものであります。それが異教のものであれ、古代のものであれ、問うところではありません。かつてピコ・デラ・ミランダがキリスト教と異教の融合に志したことをごくで思い出してみることと適切かと思いますが、とにかくここまでくれば、それはもはや宗教ではありません。そこにあるものは従って人間だけであり、中世マイナス神です。

ですからこの立場はもちろんカトリックの立場でもありません。宗教改革のプロテスタントイズムが神の絶対を主張して、中世カトリシズムを否定したように、ルネサンスのヒューマニズムの立場もまたやはり中世の否定でした。中世を構成する二つの要素、神と人間と、その一つだけをとりあげることによって、ルネサンスと宗教改革はともに中世に対して革新的な意義を獲得し、その点で共通の歴史的意義をもったのですが、宗教改革の激情はルネサンス・ヒューマニズムの冷静な観照を押しつけてしまいました。あるいはまた、この点では中世を構成する二つの要素のうち、支配的であった神の観念と直接対決した宗教改革が真に革新的革命的であったともいえるでしょう。この点については勿論考察すべき点が残されておりますが、時間もございません。この話がルネサンスの歴史的意義を考える上に一つの手掛りともなれば幸と存じます。

本稿は昭和三十八年三月二日、同九日に島田雄次郎先生がNHK・FM放送 世界史講座を担当された際の放送原稿である。
(編集子)